

奨励金No.1612

芸術活動における「ものの見方」スキルの実態解明 およびその実証研究

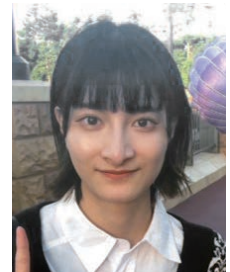
村中 さくら

金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士後期課程

Examining artist's perspective skills on their creative process and performance

Sakura Muranaka

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University, Doctoral Course



本研究では、芸術活動において創造的な作品を生み出すのに重要なスキルとされる「ものの見方」スキルおよび技術的スキルの特徴の抽出・整理を試みた。美術系大学における人物のデッサンの授業に参加し、学生らが何を考え、どのように作品を制作したのかを詳細に調査した。その結果、学生らはそれぞれ、異なる「ものの見方」スキルを異なるタイミングで発揮しており、その一連のプロセスが学生らの独創性を生み出していることが示唆された。

This study aimed to identify the characteristics of two key skills essential for creative artistic production: the artists' perspective skills and technical skills. Through participating in a life drawing class at an art university, the research examined what students thought and how they created their works. The findings suggest that students employed different types of perspective skills at various stages of the creative process, and this dynamic use of skills contributed to their originality.

1. 研究内容

1. はじめに

芸術家が創造的な作品を生み出すのに重要とされるスキルの一つに「ものの見方」がある。三浦ほか（2019）によると、それは対象を深く観察し、自分自身が何を感じるかを徹底的に追究したり、五感を駆使して対象の中にあるエネルギーや動き等を感じ取っていくことである。したがって「ものの見方」とは、単に写実的な絵を描く能力ではない、創造的な成果につながる特別なスキルと考えられる。

美術系の大学では入学後初期の授業から、一般的に必要とされる専門的スキル（綺麗な線の引き方等の技能）の習得は徹底される。金沢美術工芸大学の三浦賢治教授による「人体デッサン」の授

業シラバスによると、このような絵画の技術的スキルと「ものの見方」スキルの双方が、創造的な作品を生み出す両輪のスキルとなる。ただし、「ものの見方」スキルとは具体的にどのようなスキルで、技術的スキルとはどのように異なるのか、また、それらのスキルはどのようなプロセスを経て身につけられ、活用されるものなのかについては、依然として曖昧な点が多い。そこで本研究では、芸術活動における技術的スキルおよび「ものの見方」スキルの特徴を抽出・整理する。そのうえで、「ものの見方」スキルの習得プロセス、および活用方法を明らかにする。

芸術活動は、人々が普段用いている問題解決や計画立案などの思考活動の延長線上にあると言われる（金井・楠見、2012）。その中でも、企業のイ

ノベーション活動において求められるスキルには、芸術家の思考スキル（横地、2020）との関連性がみられ、イノベーション活動において新たな事業機会を発見する注意力（Tang et al., 2012）や創造性（Amabile et al., 1996）と類似した概念と捉えられる。以上を踏まえ、本研究では、芸術領域における「ものの見方」スキルが、企業におけるイノベーション活動に有効であるという仮説の下、参与観察から得られた知見をもとに「ものの見方」スキルの産業界への応用可能性を検討する。

2. 研究内容及び研究方法

本研究助成期間においては、「ものの見方」スキルの特徴の抽出・整理に取り組んだ。そのために、金沢美術工芸大学油画専攻2年生を対象とした授業「形体の表現」に参加した。本授業は2024年6月25日から7月12日まで開講され、ヌードモデルを用いた等身大に近いドローイング制作が行われた。学生らは同じモデルを観察するが、画材や技法は自由に選択できるため、学生によってそれぞれ様相が異なる作品が生み出されるという。本研究ではその要因として、各々が持つ「ものの見方」スキルが反映され、個々の独創性が生まれているのではないかと考えた。そこで、学生らが作品を制作する過程やその時考えていたことを詳細

に調査し、「ものの見方」スキルおよび技術的スキルの特徴の抽出・整理を試みた。

本研究では、当該授業を受講していた学生のうち二人（以下、「学生A」および「学生B」と表記）を調査対象とした。

3. 結果

以下、調査対象者である学生二人の作品制作の過程を記述する。

3-1. 学生Aの制作過程

学生Aは制作期間の大半において、モデルのプロポーションや色について写實的に描かないことを意識し、「あえて細かく観察せずに、感じたままにモデルがいる空間全体」を描画しようとしていた。また、キュビズム等に対する関心が強く、先人たちの作風を取り入れる試みも行っていた。

1日目及び2日目はクロッキー帳にてその完成イメージを模索し、主に鉛筆とアクリル絵の具を使ってラフ画を描いた。その過程では「固有の色や形に囚われすぎないようにした」という。

3日目からは大きなキャンバスに移り制作を進めていった。鉛筆でモデルのプロポーションを大まかに描きだした後、アクリル絵の具を用いて着色していった。学生Aは、モデルに対して「見る

種類	対象／方法	概要
配布資料	教授／公式HP、紙資料の配布	シラバス／スライド講義の資料
非構造化インタビュー①	教授／ノートへの記録	学生への指導内容／スライド講義に関する質問／学生の作品に対する評価
非構造化インタビュー②	学生A、学生B／ 毎授業終了後に15分程度の グループインタビューをし、 ノートへ記録	モデルを観察したり、制作をすることで気づいたこと／制作の際に意識したこと／観察していて気になった学生の行動の理由
行動観察	教授、学生A、学生B／ 授業中、ノートへの記録	教授→学生への指導方法／講評の発言内容 学生→使った画材／画材の使用方法／描いたもの／描いた順番／モデルを観察したりパネルを遠くから眺めたりする等の行動
途中生成物	途中生成物／ 毎授業終了後に写真に記録	クロッキーへのスケッチ／本制作の途中経過
最終生成物	最終生成物／ 授業最終日に写真に記録	完成作品

図1 構築したデータセット

たびに形が少しずつ変化しているのが、人間の生きている感じやリアルさが表れている」と感じ、黒のコンテをあえて雑に重ねてモデルの輪郭を曖昧にすることで、そのリアルさを表現しようとしていた。

一方、8日目からは学生Aの、モデルがいる空間に対する見方やそれに対するアプローチに変化が生じた。「暗いところは溶け込んでいて、角ばったところは目立って見える」と話し、彩度が低い色と高い色の両方を組み合わせることで、自身が解釈した「空間」を表現できることを発見した。

最後の3日間（10日目～13日目）は、これまでと方向性を一転させ、「現実に沿った形を細かく見ていき、床部分にそれを取り入れることにした」と述べ、写實的に表現しようという意識を強めた。

3-2. 学生Bの制作過程

学生Bは、「美人画のような作品を作りたい」と述べ、主に墨を用いて作品制作を進めていた。

1日目及び2日目は学生Aと同様に、まずはクロッキー帳にて完成作品のイメージを具体化させていた。モデルに対し「若々しい人と異なる独特な肉の付き方や皺を線で表現したい」と述べ、「体のラインがはっきり見えて石膏みたい」という解釈を抱いていた。

3日目から大きなキャンバスにて制作を始めた。ここでも同様に、モデルを観察しながら鉛筆で慎重に下描きをし、墨で輪郭線を描画していった。学生Bは「骨格や筋肉のつながりを意識した」と述べ、モデルの内部構造を詳細にイメージしながら制作を進めていた。

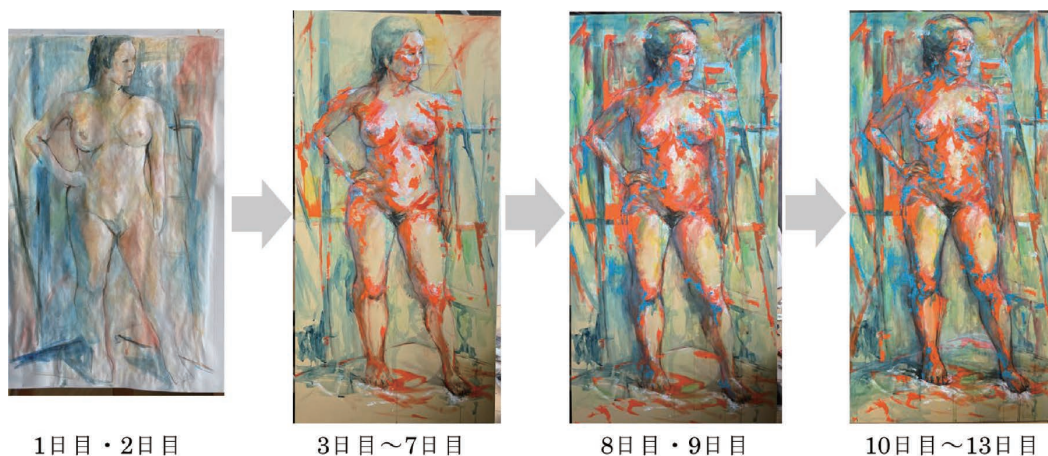


図2 学生Aの制作過程

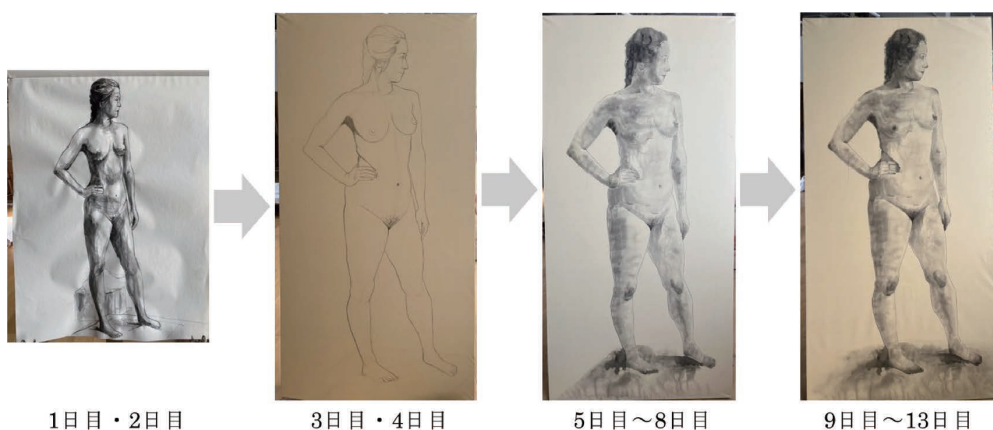


図3 学生Bの制作過程

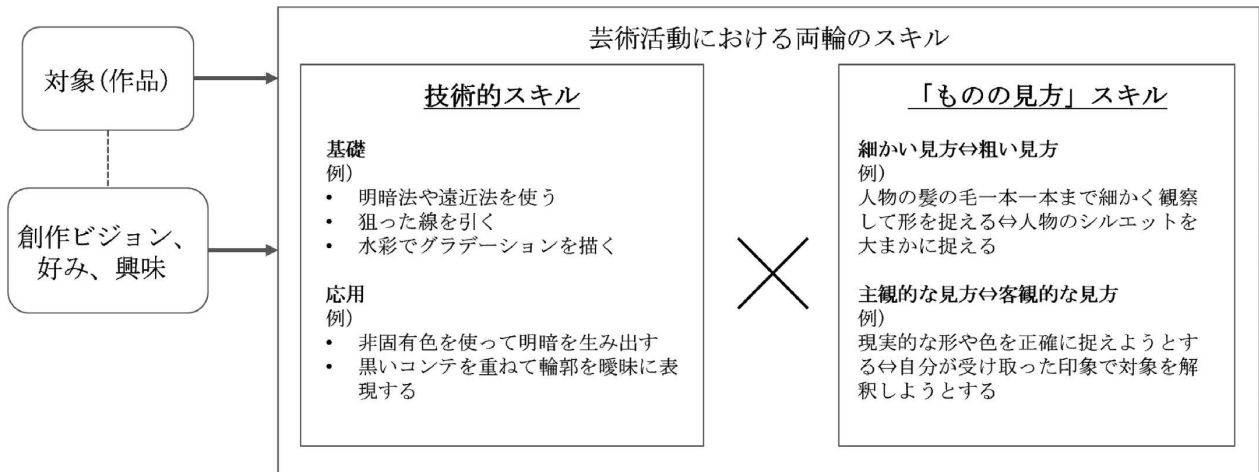


図4 「ものの見方」スキルおよび技術的スキルの関係および特徴の整理

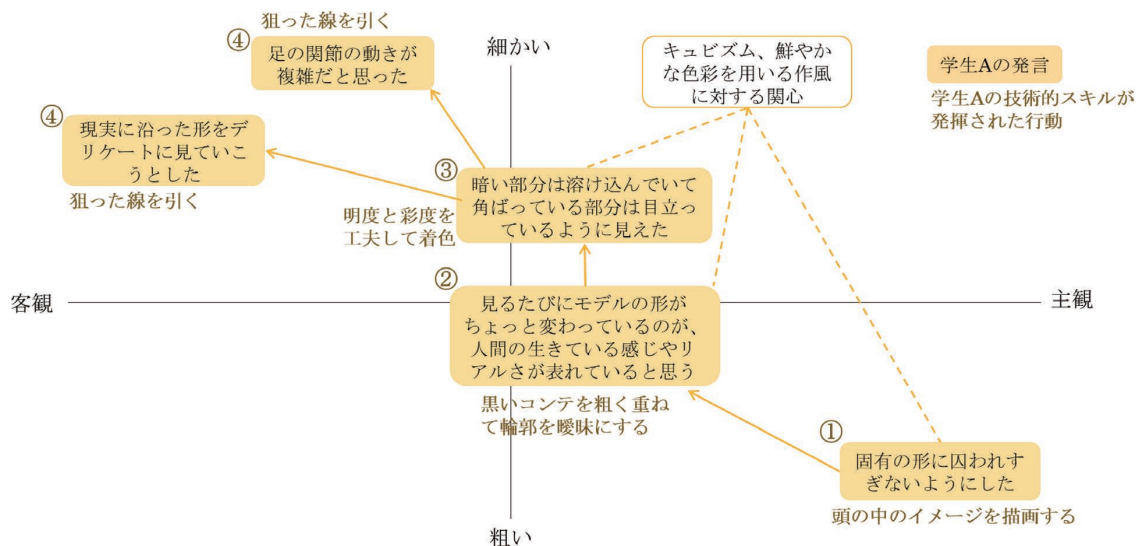


図5 学生Aの「ものの見方」スキル及び技術的スキルのダイナミクス

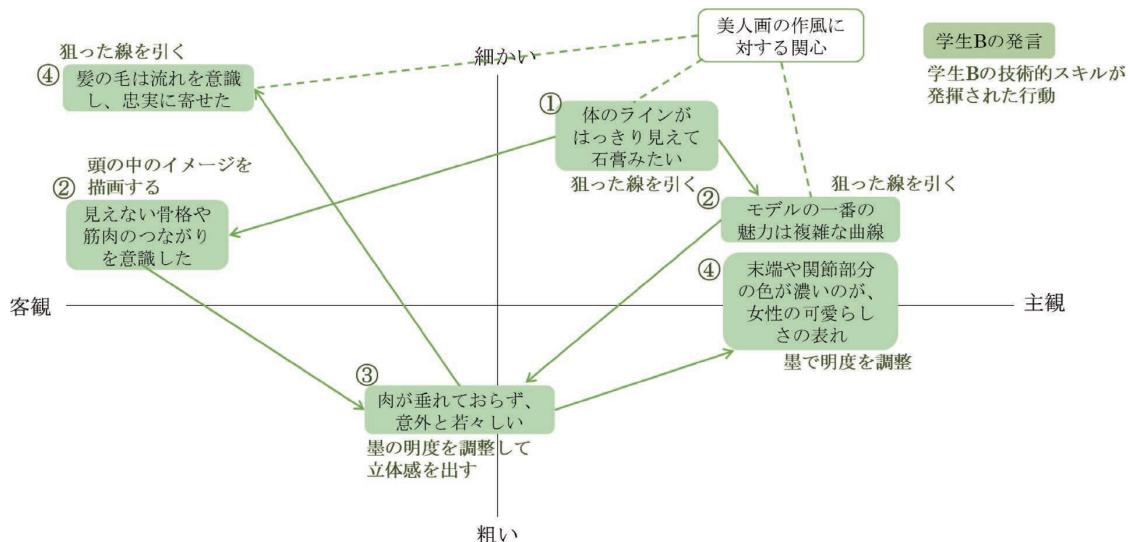


図6 学生Bの「ものの見方」スキル及び技術的スキルのダイナミクス

9日目～13日目は、髪の毛や指先などの末端部分をより詳細に観察するようになった。「髪の毛は流れを意識して忠実に寄せた」「末端や関節部分の色が濃いのが、女性の可愛らしさの表れだと感じた」など、モデルに対してさらに具体的な印象を抱くようになった。これに伴い、細い筆を用いて髪の毛を一本一本描き込んだり、指先や関節部分の色を濃くするなど、細かな作業を少しずつ進め、作品を仕上げていた。

4. 考察

本結果に基づき、「ものの見方」スキルおよび技術的スキルの関係及び特徴を整理し（図4）、そのうえで発揮されたこれらのスキルの変化の可視化を試みた（図5、6）。「ものの見方」スキルは「細かい見方⇔粗い見方」、「主観的な見方⇔客観的な見方」に分類でき、技術的スキルは、基礎スキルと応用スキルに分類できると考えた。学生らは様々な「ものの見方」スキルを作品制作の過程において使い分け、技術的スキルと掛け合わせることで、それぞれの独創性が生まれたと考える。

図5および図6では、それぞれの学生らの発言から、発揮された「ものの見方」スキルを四象限の中にプロットし、その順番を数字と矢印で表した。また、それぞれと掛け合わされた技術的スキルも配置した。図5に基づく、学生Aは、当初は「粗く、主観的な」見方スキルを発揮し、その後は「細かく、客観的な」見方スキルへと変化したと考えられる。図6に基づく、学生Bは、当初は「細かい」見方スキルを発揮し、その後、より「粗い」見方スキルを発揮するようになっていった。学生二人はその制作の過程において異なる種類の「ものの見方」スキルを異なる手順で発揮しており、その一連のプロセスが、学生らの独創性を生み出していると考えられる。

「ものの見方」スキルの類型や技術的スキルとの違いについては、今後もさらに検討が必要となる。また、本研究のその他の目的である「ものの見方」

スキルの習得プロセスおよび活用方法の解明、およびイノベーション活動への応用可能性の検証についても取り組んでいく。

2. 発表（研究成果の発表）

研究報告およびディスカッション

- ・2024年8月 情報科学芸術大学院大学への訪問および発表
- ・2024年8月 味の素株式会社バイオ・ファイン研究所への訪問および発表
- ・2024年8月 東京大学渡部研究室での発表（オンライン）
- ・2025年2月 豊田市美術館への訪問および発表